
● 沖 縄

上 地 隆 裕

当地のクラシカル楽壇は、特に戦後の混乱期から平成の今日に至るまで、良くも悪くも米軍基地そして同軍属の動静に、その質的向上を左右されてきた部分大きい。残念ながらその構図は、これからも変わらないと思われる。米軍基地施設があるが故の楽壇発展を阻害する要因、つまりそれを社会的な現実問題として捉えると、そこには幾つかの例が挙げられる。その中で最大のものを挙げると、各主要公演会場の大半が軍用機の飛行ルートに近いか、あるいは基地施設に隣接しているかのどちらか、ということだ。それに付随して、学童の音楽指導への影響と、コンサート終了後の軍属との対応の問題が出て来る。

前者では、例えば正規の音楽授業や吹奏楽等のクラブ活動の際、校舎施設の上空で軍用機が激しい爆音を立てて飛来するため、演奏や鑑賞時に集中できなくなる、という深刻な状況生まれる。後者では、帰路につく聴衆と公演場周辺やその近くでたむろする軍人との対応で余計な緊張を強いられる、ということ等だ。他県の人々には理解しづらいだろうが、当県のクラシカル関係者は、軍事基地がある限り、そのように否定的な状況下で奮闘を続けねばならない。

これから本題に入るが、2016年度の本県楽壇は総じて終始低調に推移した。理由は前年同様、「当地のようなクラシカル音楽発展途上の場所にいる実演家達」の「お手本とすべきレベル＝すなわち中央あるいは世界水準の演奏家達に触れ合う機会」が極少だったこと、に尽きる。そのため昨シーズン中本県内で提供された公演は、大半がローカル演奏家主体の、いわば「誇大広告」を掲げただけで中身は「発表会」のような水準に留まっていた。

いくら次代の楽壇を背負う「演奏者」「聴衆」のタマゴ達を学校現場で育成しても、やはり「論より証拠」すなわち「世界に通用する音」をナマで聴かせる機会、を作り続けることには敵わない。(ただしこの点は、実演家というより、企業や資金力のある主要マスコミ各社によるメセナ事業等、がカバーすべきものだと思う。) 本県でその機会を増やすことは、絶対不可欠である。

それでも数は少ないが、収穫、と呼べる公演は幾つか見られた。特にオーケストラの分野がそれで、具体的には、本県の主力(沖縄交響楽団(OSO)＝創立60年目を迎えた、琉球交響楽団(RSO)＝創立15周年及び定期公演数が31回目を記録した、琉球フィルハーモニー管(RPO)、沖縄フィルハーモニー管(OPO)と学生楽団(琉球大学管＝創立59年目に達した)の各団体に新しく加わったシュガー・ホール管が、無事4シーズン目に突入した。これで外面的上は、本県では7つの大型アンサンブルが活動中、ということになる。しかし実態は、各団の構成楽員が重複しているのだ。つまり一人の楽員が、複数の楽団に所属しているのである。従ってそこには互いに切磋琢磨する機会があまりなく、その奏者は単に演奏会の回数を増やす役割しか果たせない。腕の立つ奏者が限られるローカルの悲劇といえればそれまでだが、その問題の解決が今後の大きな課題だ。

そしてそれらのアンサンブルをはじめ、本県楽壇総体に刺激

を与えた公演として、辻井伸行、牛田智大、F・ヘミングらのピアニスト、島田真千子(Vn)、福田進一、N・ビリングス(いずれもギタリスト)、幣隆太郎(Cb)、雲井雅人(Sax)らの中堅若手、名実ともに世界のコンサート・サーキットで活躍するヴェリタスSQの四人、また音大生及び県内実力派を主体にして特別に編成した楽団を地上淳一が指揮、マーラーの交響曲第一番(巨人)の公演と、唯一の名流外来チェコ・フィル・ゾリステン等が挙げられる。